

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書

第 6 集

岳惣寺遺跡

1989・3

宮崎県西都市教育委員会

序

本報告書は、周知遺跡の土採取に伴い実施した発掘調査結果の報告であります。

調査の結果、遺跡の南側において縄文土器が出土し、この地域が縄文時代それも早期から生活が営まれていたことが判明しました。

また、柱穴329個に加え、土壙及び土坑が19基も検出されました。中でも、14号土壙からは土師器に加え107枚もの明銭（洪武通宝）と人骨が出土しました。県内においてもこのように多量の明銭及び人骨片が出土した中世墓はほとんどなく、さらに、埋葬されていたのが壮年女性であるということで、たいへん興味深いものがあります。このように、今後中世墓を考えるうえで貴重な資料を得ることができました。

これらの成果をまとめた本書が、今後の文化財保護の一助となり、関係各位の参考となりますれば誠に幸いです。

最後に、発掘調査にたずさわっていただいた方々、並びに事業主・横山英宝氏には衷心より謝意を表します。

平成元年3月31日

西都市教育委員会

教育長 篠原利信

例　　言

1. 本書は、周知遺跡の土採取に伴い、昭和63年度に実施した岳惣寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、西都市教育委員会が実施した。調査関係者は次のとおりである。

調査主体 西都市教育委員会

教育長	篠原利信
社会教育課長	伊藤政実
同文化財係長	黒川忠男
同嘱託	緒方吉信
同主事	蓑方政幾

調査員 西都原古墳研究所

所長	日高正晴
嘱託	緒方吉信
主事	蓑方政幾

遺物整理協力 整理員 関谷憲子

3. 本書に使用した図の作成・執筆・編集は蓑方が行った。
4. 本書末尾のまとめは日高が行い、第1章第2節は緒方が執筆した。
5. 本書の遺物実測は、関谷・蓑方が行った。
6. 出土遺物の整理は、関谷があたった。
7. 本調査による出土遺物は、西都市歴史民俗資料館に保存し展示される。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 遺跡の位置と歴史的環境	1
第3節 調査の概要	2
第2章 遺構と遺物	7
第1節 繩文時代の遺構と遺物	7
第2節 弥生時代の遺構と遺物	9
第3節 古墳時代以降の遺構と遺物	10
第3章 まとめ	33
第4章 岳惣寺遺跡出土の中世人骨について	45

挿図目次

第1図 岳惣寺遺跡位置図	4
第2図 岳惣寺遺跡の遺構分布図	5～6
第3図 南北土層図（中央部）	13
第4図 東西土層図（中央部）	14
第5図 3号土坑及び14号土壙実測図	15
第6図 1号～6号土坑実測図	16
第7図 7号～10号土坑実測図	17
第8図 11号～18号土坑実測図	18
第9図 遺構実測図（柱穴）	19
第10図 遺構実測図（柱穴）	20
第11図 出土遺物実測図・拓影（繩文土器）	27
第12図 出土遺物実測図・拓影（繩文・弥生土器）	28
第13図 出土遺物実測図（弥生土器・土師器）	29
第14図 出土遺物実測図（土師器・須恵質土器・陶器）	30
第15図 出土遺物実測図（白磁・青磁・磁器・染付・土錘・石錘）	31
第16図 出土遺物実測図（石器）	32
第17図 出土遺物実測図（石器・鉄製品・木製品・貝殻・明錢）	33

表 目 次

表 1 石錘計測表	9
表 2 土師器計測表	23～24
表 3 土錘・石錘計測表	26

図 版 目 次

図版 1 遺構・遺物検出状況	39
図版 2 遺構（土坑・土壤）	40
図版 3 遺構（柱穴）	41
図版 4 出土遺物	42
図版 5 出土遺物	43
図版 6 出土遺物	44

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

市建設課より「都於郡城跡の南側にある台地の土採取を行っているが、ここは遺跡ではないのか」との連絡を受けた。このことは、土採取に伴う道路使用許可申請書が提出されたことによってわかったもので、さっそく現地に向かった。その結果、この台地は都於郡城8代城主・伊東祐充公の菩提寺である岳惣寺があったと推定されているところで、それをとって岳惣寺遺跡と称している周知の埋蔵文化財包蔵地であることを確認した。そこで、すぐさま事業者に事情を説明し土採集を中止してもらい、遺跡の保護について協議を開始した。しかし、土地を買収していること、土をすでに運び出していること等で、どうしても中断できないことから記録保存の措置を講じることになった。発掘調査は、事業者からの依頼を受けて西都市教育委員会が実施し、古墳研究所が担当した。

発掘調査は、昭和63年7月19日に着手し、同年9月26日に終了した。

第2節 遺跡の位置と歴史的環境

岳惣寺遺跡は、中世日向国の雄伊東氏の本拠地・都於郡城に於ける繩張り範囲内にあり、城に入るには、ハッ口として荒武坂口・甕割坂口・谷之坂口・奈良瀬坂口・鹿滑（六月）坂口・筑後永坂口・佐土原道・薩摩道がある。

登城口の一つ薩摩道は、ほぼ南北線上に沿って北上し、西方の三財平野から登った荒武坂と甕割坂を合して大手門に直進する。岳惣寺遺跡は、この大手道路の薩摩道と荒武坂が合流し、再度甕割坂と合する中間位置に所在する。

近世期、現都於郡の町はナヤ町と称されたゆるやかな坂道の町並みである。町の西端道路は急曲して南に進み旧薩摩道と合するが、急曲地の西辺は高台となり、伊東氏ゆかりの荒武神社が祭られている。

荒武神社台地の裾部からは、間道となる小道が西に向かって延びている。この道路を、凡そ300m進むと旧薩摩道からの大手門道に突き当たり、その正面台地が岳惣寺遺跡である。

岳惣寺とは、都於郡城8代城主・伊東祐充の菩提寺として建立された寺院で、早期

に廃毀し年月も詳らかでないが、昭和60年度に実施した遺跡詳細分布調査により、遺物の散布地として岳惣寺遺跡を設定した。

都於郡城の築城については、延元2年（1337）4月、足利尊氏に仕え戦功賞により都於郡が贈与され、伊豆国から下向した伊東祐持に初まり、2代城主祐重によって大改築が成され、現存する繩張り跡の様相を呈するにいたった。

それより200有余年、伊東氏累代の居城となり、戦国の時代を過ごすことになるが、天正5年（1577）12月、伊東の臣福永・野村両氏の謀反によって、都於郡城に於ける伊東氏の歴史は閉じられる。

その後、佐土原入封の島津氏の支城となって引き継がれるが、元和元年（1615）徳川氏の発した一国一城令によって、難攻不落を誇った都於郡城も、城としての性格は終わりを告げる。

8代城主伊東祐充は、7代城主尹祐の嗣子として永正7年（1510）に誕生し、14才で家督を継承するが、天文2年（1533）8月三財の田中に於いて病のため24才の生涯を閉じている。

祐充の菩提寺・岳惣寺（岳宗寺）が建立されたとき、その南東に道を隔てては父尹祐の菩提寺・大用寺も建立されていた。都於郡城の強固な繩張り等を見るとき、各所に多くの寺院を確認することができる。

特にハッコ周辺に多く、このことは敵方の攻撃を受けたとき、ただちに城としての役割を果たす目的を有したのが当初の寺院であった。大用寺・岳惣寺も他の寺院と同様、薩摩道・荒武坂口、特に大手の守りとしてこの地に建立されたと思われる。

この両寺は、ともに早期に廃毀され、跡地として認めることのできる遺跡・遺物の確認はできないが、岳惣寺跡から西方を遼望すると、足下に三財平野が広がり、九州山地から湧水した三財川が蛇行して流れ、岳惣寺遺跡の裾部を洗って北方にその流れを代える。

平野部を狭んだ指呼の台地・小豆野原東端には、約70基の古墳が点在し、都於郡城に關係した岩崎稻荷や石野田城跡さらには、震がかった中原城跡等を望むことができる。

第3節 調査の概要

今回調査の対象となったのは、岳惣寺遺跡の所在する台地の南側約3分の1で、面

積としては1,200m³程である。

調査は、まず遺構保存状態及び土層確認のためのトレンチを、南北に1本・東西に1本入れ、その結果をもとに東側から順次重機により表土（耕作土）を剥ぎ、本格的な調査に入った。

調査の結果、台地の南側から縄文時代早期～晚期の遺物が出土し、この台地では縄文時代早期から生活が営まれていたことが確認できた。

また、その他に329個のピット（柱穴）をはじめ土壙1基を含む19基の土坑と溝状遺構が検出された。中でも14号土壙からは、土師器に加え107枚もの明銭（洪武通宝）が出土し、中世墓であることが確認された。なお、これだけの明銭を入れて埋葬した例は珍しく、中世墓を考えるうえでは貴重な資料となった。

さらに、多くのピット（柱穴）が検出されたことにより、これがそく岳惣寺のピット（柱穴）であるとはいえないが、掘立柱建物が存在していたことは確認できた。

これらの詳細については、後述するとして中世墓が検出されたこと、また多くのピット（柱穴）・土坑等が検出されたことは大きな成果である。



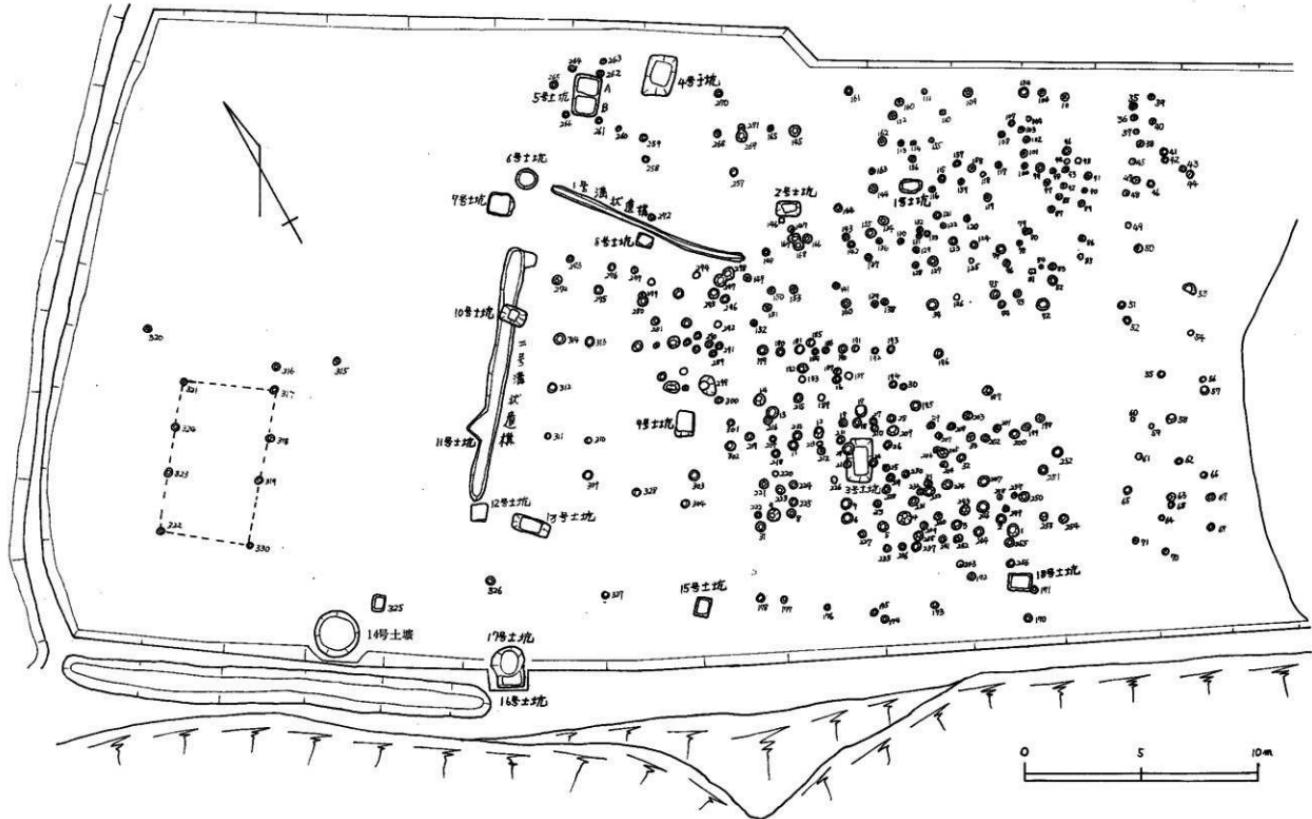
1 : 25,000

0 500 1000 1500 2000 2500

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代
5001	都於郡村古墳	大字荒武 367 乙	円 墳	古 墳
5002	都於郡城跡	大字施野田字高屋	城 跡	繩文～江戸
5003	岳惣寺跡	大字荒武字都於郡	散布地 寺 跡	繩文～江戸
5004	大中寺跡	大字施野田字高屋	寺 跡	室町～江戸
5005	定徳院跡	大字都於郡字向之坂	寺 跡	江 戸
5006	南ノ城跡	大字施野田字中尾	城 跡	室町～
5007	円光院跡	大字施野田字円光院	寺 跡	室町～江戸

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代
5008	常楽院跡	大字施野田字中尾	寺 跡	江 戸
5009	一乗院跡	大字施野田字向之城	寺 跡	室町～江戸
5010	黒貫寺跡	大字岩爪字園田	寺 跡	中世・江戸
5011	原向遺跡	大字施野田字原口	散布地	繩文～平安
5012	東ノ城跡	大字施野田字原口	城 跡	室町～
5013	向ノ城跡	大字施野田字向ノ下	城 跡	室町～
5014	日隱城跡	大字施野田字城内	城 跡	室町～

第1図 岳惣寺遺跡位置図



第2図 岳惣寺遺跡の遺構分布図

第2章 遺構と遺物

第1節 繩文時代の遺構と遺物

1・遺構

繩文時代の遺構は検出されなかったが、台地の南側より繩文時代早期～晚期の遺物が出土しており、遺構の存在が推定される。

2・遺構

繩文土器（第11図・第12図）

繩文土器は、台地の南側を中心に790点が出土している。量的には、繩文時代後・晚期の土器片が多いが、中には、早期や前期の土器片も含まれている。

早期（第11図1～10）

早期の土器としては、貝殻条痕文土器（前平式土器）・塞ノ神式土器がある。

1は、口縁部に貝殻腹縁によって連続刺突を行い、胸部以下は貝殻条痕を施しており、前平式土器の特徴をよく表している。

2～10は塞ノ神式土器で、口縁部と胸部に施されている文様のモチーフによって5つに分類できる。

I類 口縁部に幾何学的な沈線と刺突を施すもの（8・10）

II類 口縁部に棒状のもので2列単位で刺突を施すもの（2・3）

III類 口縁部は無文で頸部に4条の平行沈線を施し、そのうえからジグザグ状に2本の沈線を施すもの（5）

IV類 胸部に2条の平行沈線と無文帯を挟んだ縦位の撚糸を施すもの（6・7）

V類 平行する沈線内に撚糸文を施すもの（4・9）

以上、塞ノ神式土器を5つに分類したが、I類はいわゆる平柄式土器で、II・III類は塞ノ神B式・IV類は塞ノ神A式a・V類は塞ノ神A式bである。

前期（第11図11～17）

前期の土器としては、曾畠式土器がある。量的にはほんのわずかであるが文様が同一のものはなくバラエティに富んでいる。11は、口縁部に1条の刺突列点文を施し、その下に横位の短沈線を施している。また、口唇部に刻目・口縁部内側に4条の短沈

線を施す。12は、細い縦位と横位の短沈線を施し、口唇部に刻目・口縁部内側に2条の短沈線を施している。13は、口縁部に縦位と横位の短沈線、口縁部内側に2条の短沈線を施している。14は、口縁部の外側と内側に短沈線を施し、口唇部に刻目を施している。15は、口縁部に1列の刺突列点文、そのすぐ下に1条の沈線さらにその下に波状の沈線を2条施している。16は、胴部で丁寧な四角組合文を施している。17も胴部で、縦位の短沈線を幾条にも施している。

後期（第12図18～23）

後期の土器は、文様に乏しく無文土器がほとんどである。器形としては深鉢が多い。23は台付鉢？の台の部分であると思われるが、細線によって丁寧に細かい文様を施している。

晩期（第12図24～26）

晩期の土器は、後期の土器と同様無文土器がほとんどであるが、中には後期の御領式土器の系統をひくものも含まれている。24は、口縁部径28.4cm、胴部が「く」字状を呈した浅鉢で、口縁部に2条の凹線を施している。25は、口縁部に4条の太い凹線を施す深鉢である。26は、口縁部に1条の細い凹線を施し、丁寧なヘラ磨きで調整した精製浅鉢である。

石器（第16図・第17図）

石器は、調査地の南側を中心に打製石斧・石錐・尖頭器・石鎌・敲石が出土している。

打製石斧は13点出土しているが、中でも93は最大で、長さ17cm・幅5.5cm砂岩製である。94・95は、頁岩製であるが、94は刃部を95は下半分を欠損している。

磨製石斧は、打製石斧に比べ少なく、破片のみで完成品は出土していないが、始刃のものが2点（97・98）含まれている。

石錐は13点出土しているが、長軸に切り目を有するもの（101・102・103）と長軸に打ち欠きを有するもの（99・100・104）の両方が出土している。

尖頭器（105）は1点のみで、長さ5.8cm・断面は三角形を呈している。調整は、ナイフ型石器的に基部は両サイドをその他は片側のみを行っている。石材はチャートである。

石鎌は、5点出土しているが、形態的には二等辺三角形のものが多い。基部でみると凹基式（106・107）と平基式（108）とがある。石材は、黒曜石とチャートを使用

表1 石錘計測表

単位: cm

図面番号	高さ	幅(中央)	厚さ(中央)	備考
第16図-99	5.0	3.0	1.4	切り目
" - 100	5.5	3.1	1.1	"
" - 101	5.2	5.9	1.2	打ち欠き
" - 102	6.4	3.5	1.4	"
" - 103	7.7	5.0	1.5	"
" - 104	5.9	4.7	1.2	切り目

している。

敲石は1点で、109は長軸11.7cm・短軸10.5cm・厚さ4.3cmの橢円形を呈した砂岩製のものである。

石器は1点で、110は長軸10.5cm・短軸8.5cm・厚さ2.5cmの楕円形を呈した砂岩製のものである。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1・遺構

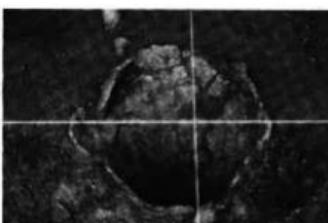
弥生時代の遺構は検出されなかったが、南側を中心に弥生土器が出土しているので遺構の存在が推定される。

2・遺物

弥生時代の遺物としては、弥生土器がある。

弥生土器(第12図・第13図)

(弥生土器出土状況)



弥生土器は、251点出土している。ほとんどが小破片で判断しにくいか器形としては甕・壺・鉢等が多いようである。29は、調査地の南端部から出土したもので、口縁部は壊れていたものの、胴部から底部にかけてほぼ完全な形で出土した。口縁部径12.6cm・器高27cm・底部径9cm・多少は変形しているものの、平底の底部からゆるやかに立ち上がり胴部中央からほぼまっすぐ立ち上がる甕である。27は壺片・28は鉢片である。

第3節 古墳時代以降の遺構と遺物

1・遺構

古墳時代以降の遺構としては、ピット（柱穴）329個・土坑18基・土塁1基・溝状遺構2ヶ所・掘立柱建物1軒が検出されたが、ごぼうを植えるために縦横無尽にかなり深いところまでトレッチャで攪乱されており、遺構検出は困難であった。

ピット（柱穴）（第9図・第10図）

ピット（柱穴）は329個も検出されているが、その80%以上は東側に集中している。形は方形のものが4個、その他は円形である。規模は、口径18cm～85cm・深さ10cm～88cmと様々で、比較的变化に富んでいる。埋土は黒色土が多いが、中には灰白色の粘土が混入しているものもある。

これらピット（P）の検出については、岳惣寺関係を含めた掘立柱建物の手がかりを求めていたが、ピットがあまりにも1部分に集中しており、掘立柱建物は西側に1軒確認しただけである。これについては後述するとして、これだけのピットが検出されたことは、何回となく同場所に掘立柱建物が建てられたことを表しており、より複雑なピット群となっている。

遺物は、土師器がP-91・117・123、青磁がP-37・145、染付がP-158等から出土している。

掘立柱建物（第2図）

掘立柱建物は西側に1軒確認されたのみで、1軒×3軒のわりと小さな建造物である。ピットの大きさは、口径28cm～42cm・深さ10cm～36cmで比較的小さい。遺物は出土していない。

土坑・土塼（第6図～第8図）

土坑及び土塼は、ピットが集中しているところの少し西側を中心にして計19基が検出された。プランは、長方形プランが最も多く15基、その他円形プランが2基、方形プランが2基で、土塼は円形プランを呈している。

1号土坑は北東部で、土坑の中ではいちばん小さい。長軸0.8m・短軸0.6m・深さ0.35mの長方形プランを呈している。遺物は出土していない。

2号土坑は、長軸0.9m・短軸0.6m・深さ1.5mで、遺物は出土していない。

3号土坑は、土坑の中でも最大で、途中ボラ層（IX・X層）を含めてV層～XⅢ層にまで掘り込まれている。長軸1.9m・短軸1.15m・深さ4.03mの長方形プランを呈

している。底面は、長軸1.25m・短軸0.8m、中心より南側に長さ38cmと20cmの石が出土している。

埋土は、第5図で示したように黒褐色土及び灰白粘質土を含む褐色・黒褐色土であるが、底面上部から青灰色粘質土のみの層が検出された。この土坑の使用目的を考えるうえでは貴重な資料である。

遺物は、縄文土器8点・土師器50点・青磁5点・陶器1点・石器3点の計67点が出土している。

4号土坑は、調査地の北部で、長軸1.35m・短軸1.17m・深さ1.16mの長方形プランを呈している。底面は軸0.85m・短軸0.75mで、ゆるやかな凹レンズ状になっている。

遺物は、土師器1点・瓦器質土器3点・陶器5点の計9点が出土している。

5号土坑は、4号土坑のすぐ西側である。当初2段状になっていると思われたが、最終的には、2基の土坑が切り合っていた。よって、全体的には数が1基増すことになった。この2基の内北側をA・南側をBとするとAは長軸1.05m・短軸0.8m（推定）・深さ1.9m・Bは長軸1.1m・短軸1m（推定）・深さ1.2mで両方とも長方形プランを呈している。

埋土は、Bが黒褐色土であるのに対し、Aには多量の灰白色粘質土が混入していた。その灰白色粘質土中から多量の土師器等が出土している。

遺物は、土師器が完形品を含めて306点・陶器1点の計307点が出土しているが、そのほとんどがAからである。

6号土坑は、5号土坑の4m西側で、上縁の直径0.8m・底面径0.65m・深さ1.08mの円形プランを呈している。

遺物は、土師器1点・陶器1点・金属器1点の計3点である。

7号土坑は、6号土坑のすぐ西側で、長軸0.9m・短軸0.82m・深さ2.48mの方形プランを呈している。

遺物は、縄文土器4点・土師器11点・陶器12点・石器1点の計28点が出土している。

8号土坑は、長軸0.8m・短軸0.7m・深さ2.38mの長方形プランを呈しているが、上面と底面が上から見るとかなりよじれている。

遺物は、土師器41点・陶器1点の計42点が出土している。

9号土坑は、調査地のほぼ中央部、長軸1m・短軸0.85m・深さ2.8mの長方形プランを呈している。遺物は出土していない。

10号土坑は、長軸1m・短軸0.78m・深さ2.8mの長方形プランを呈している。底面は、長軸0.45m・短軸0.25mとかなり小さく、断面は弾丸状になっている。また、2号溝状遺構と切り合っている。

遺物は、土師器12点・陶器1点・金属器1点の計14点が出土している。

11号土坑は、長軸1.1m（推定）・短軸0.8m（推定）・深さ0.55mの長方形プランを呈している。10号土坑と同様2号溝状遺構と切り合っており、土縁部の半分が欠損している。遺物は出土していない。

12号土坑は、長軸0.82m・短軸0.75m・深さ2.05mの方形プランを呈している。底面は、長軸0.8m・短軸0.7mで、ほぼ垂直に掘り込まれている。

遺物は、土師器が1点出土しているのみである。

13号土坑は、長軸1.56m・短軸0.7m・深さ1.37mの長方形プランを呈している

が、長軸が短軸の2倍以上であり、他の土坑に比べて細長く見える。

遺物は、縄文土器が2点・土師器が完形品を含めて24点・石器が1点の計27点が出土している。

14号土壙は、唯一中世墓として確認されたもので、上縁径1.9m・底面径1.5mの円形プランを呈している。

埋土は、1層のみで黒褐色土が混入していた。

遺物は、縄文土器が5点・土師器が39点・石器が1点・明銭（洪武通宝）が107点・木製品が1点・鉄製品が1点の計154点の他に頭骸骨や下顎骨・大腿骨等の人骨片が出土している。

この人骨は、出土した状態から頭を北にした屈伸葬であることが確認された。さらに、驚かされることは、人骨が壮年の女性であることである。

また、洪武通宝が107枚も出土しているが、

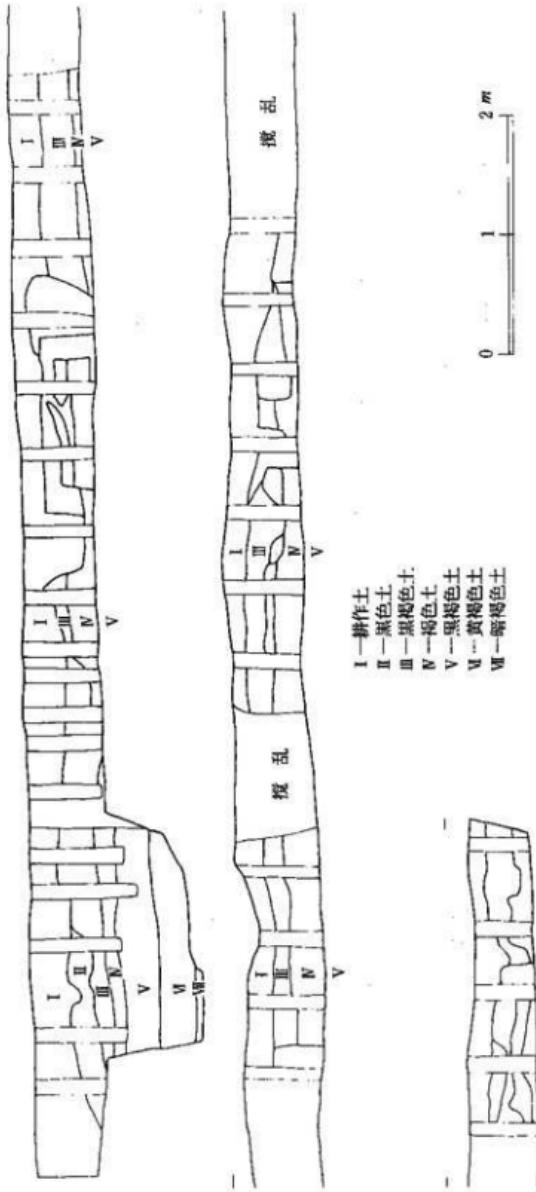
2ヶ所に集中して出土している。1ヶ所は、南

端部で麻の紐に48枚を通した状態で出土してい

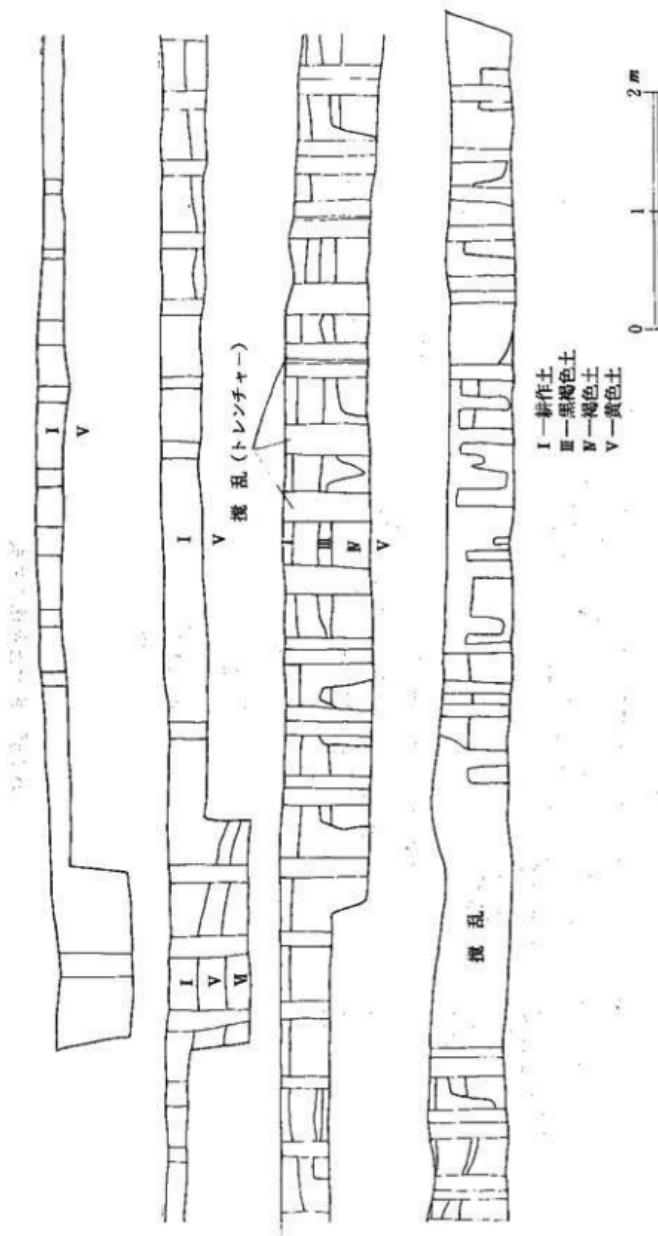


（明銭〔洪武通宝〕出土状況）

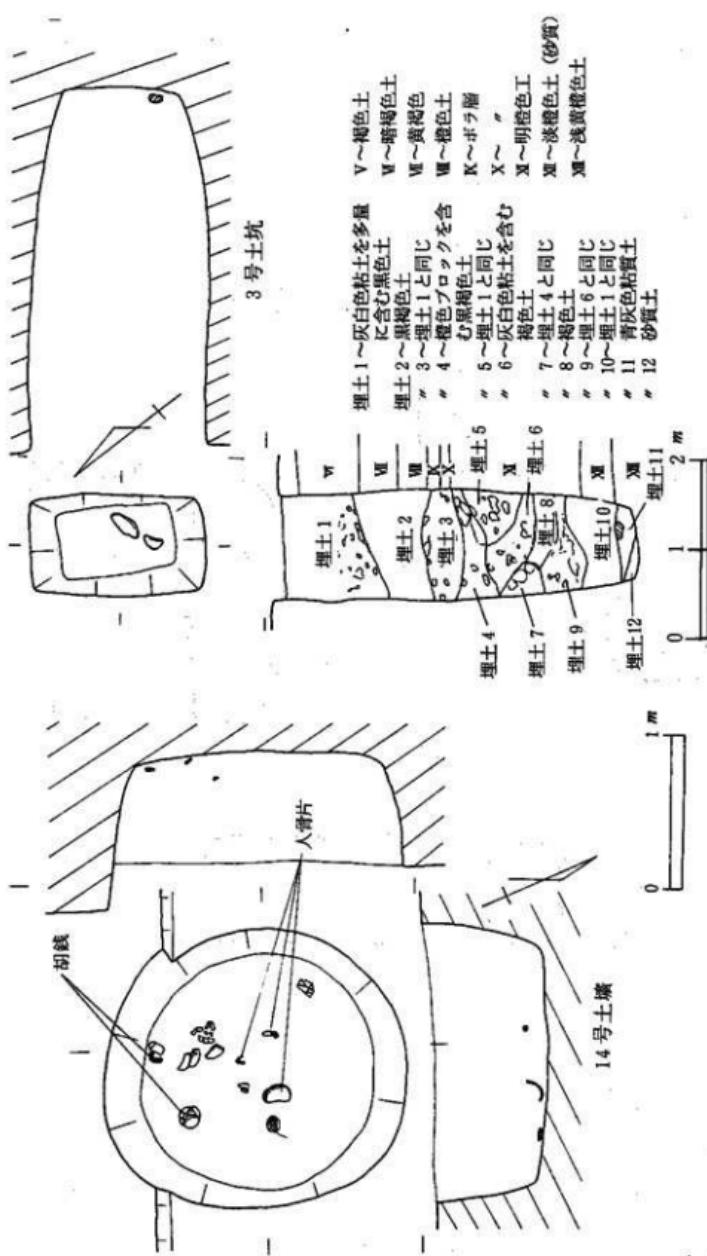
第3圖 南北土層圖（中央）

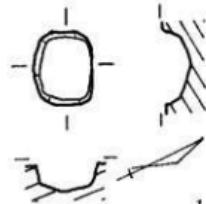


第4図 東西土層図(中央)



第5図 3号土坑及び14号土塙実測図

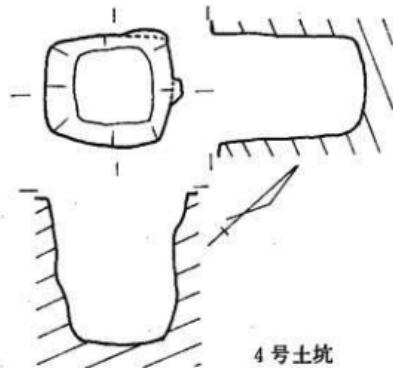




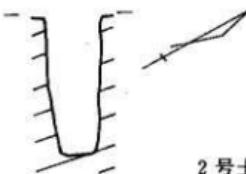
1号土坑



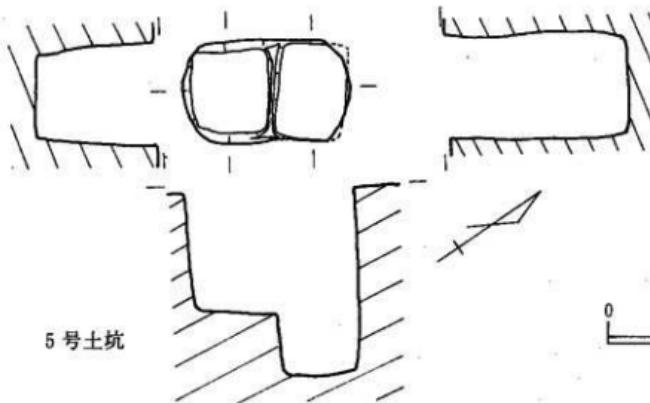
2号土坑



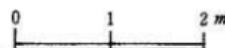
4号土坑



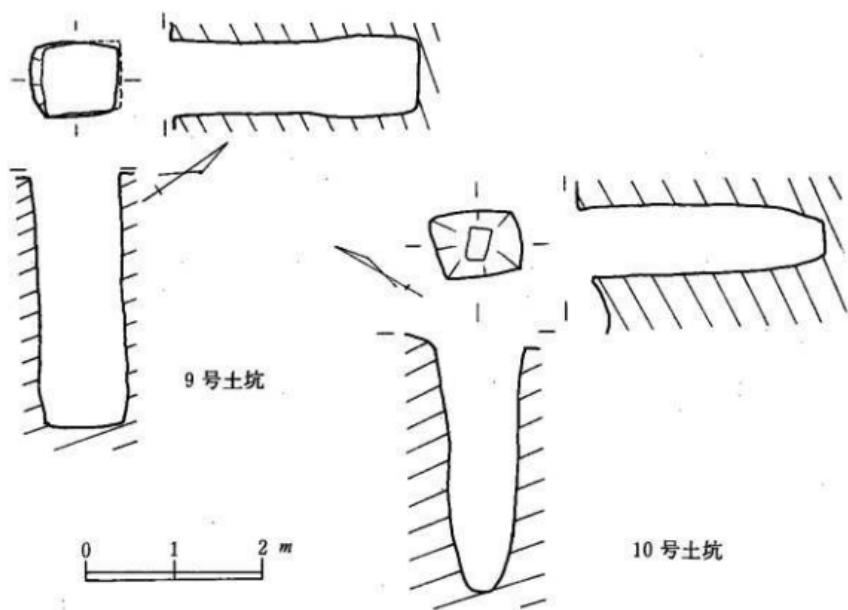
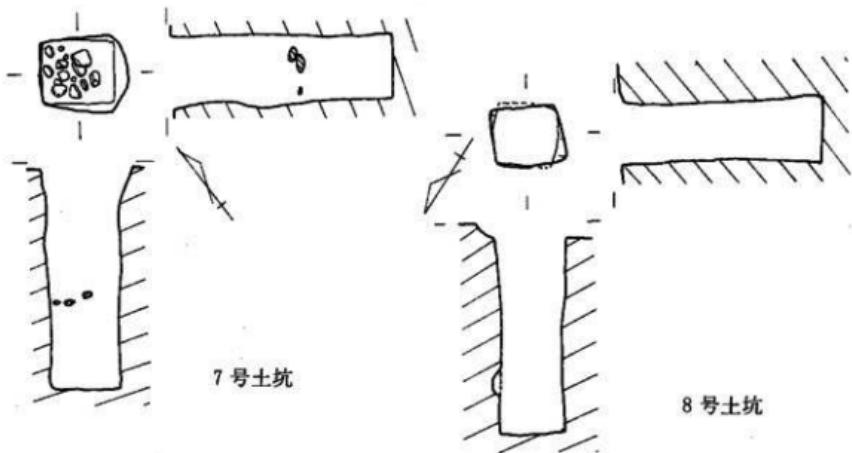
6号土坑



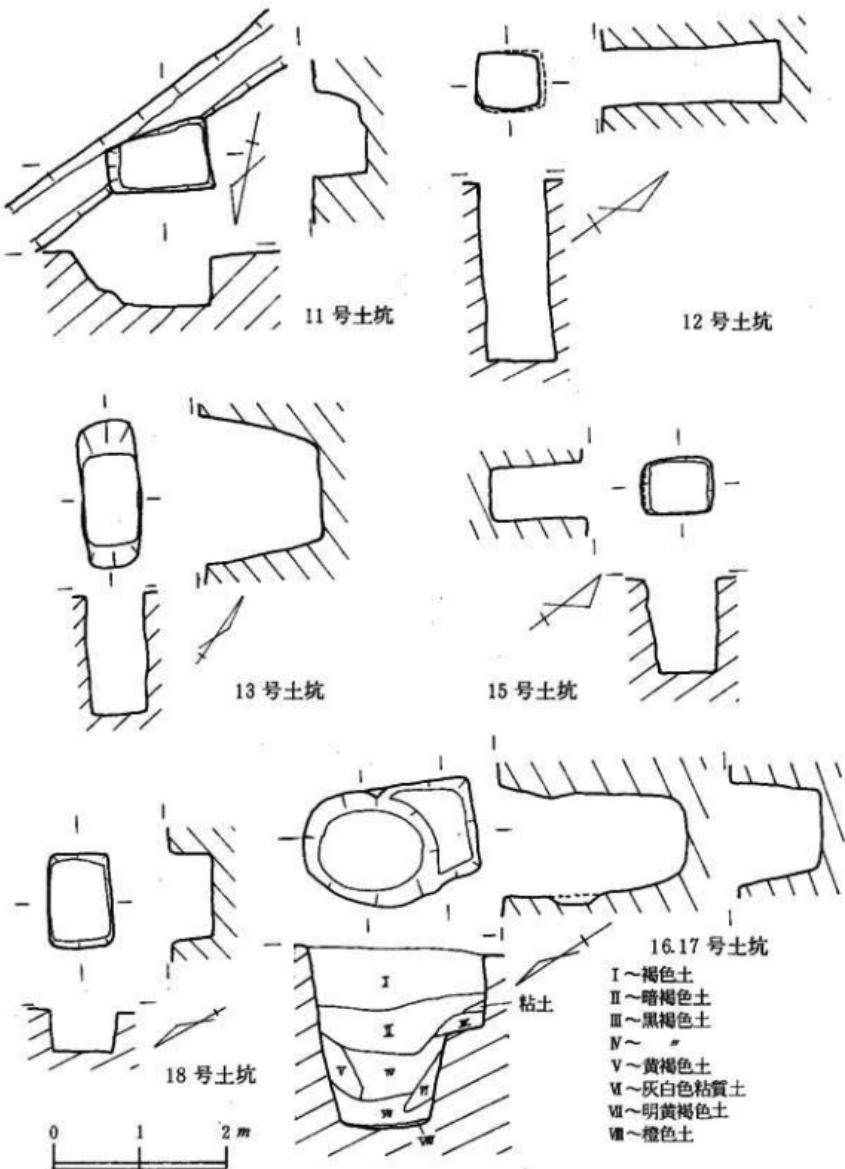
5号土坑



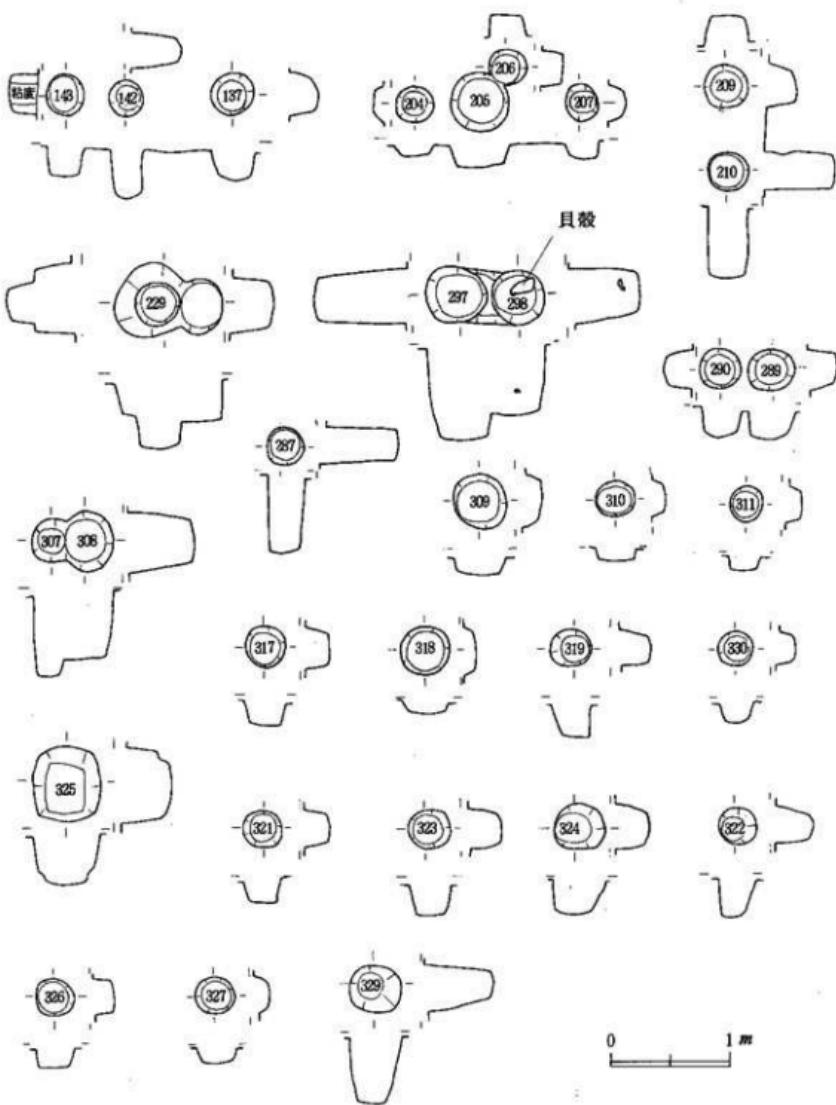
第6図 1号～6号土坑実測図



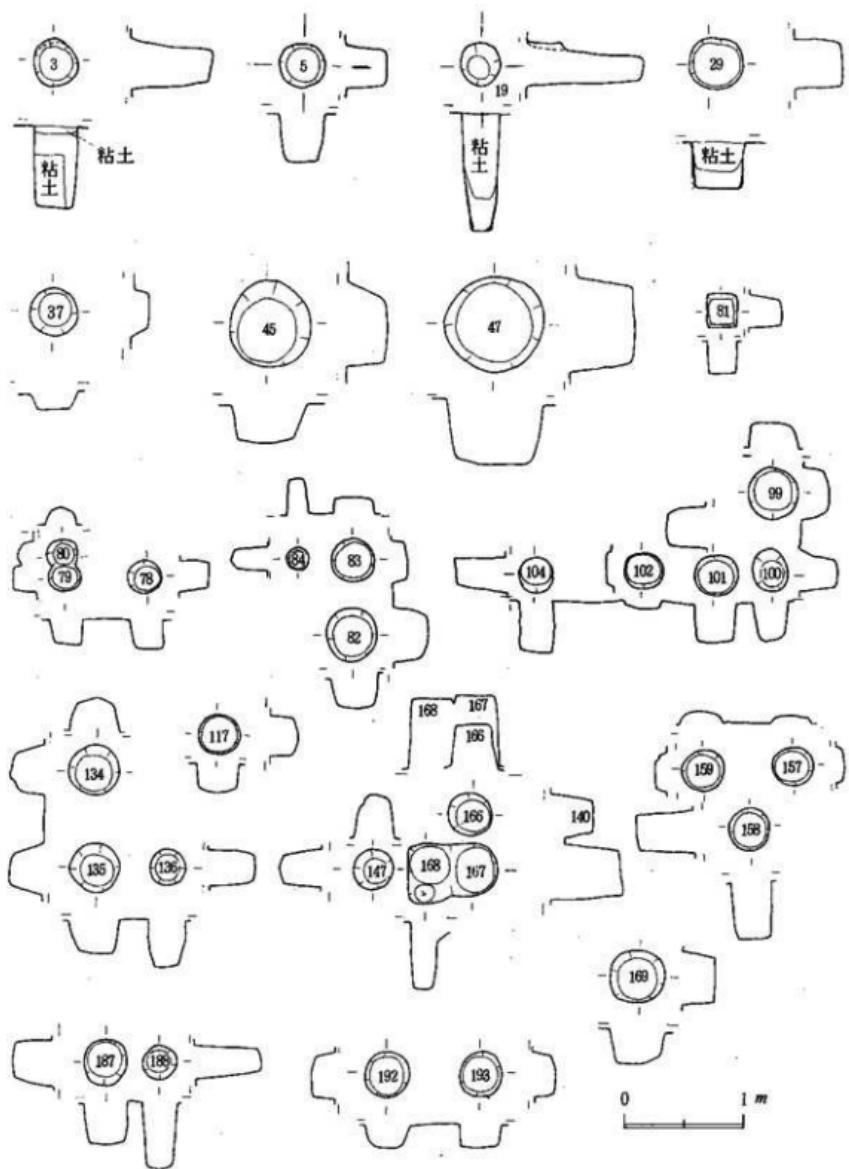
第7図 7号～10号土坑実測図



第8図 11号～18号土坑実測図



第9図 遺構実測図(柱穴)



第10図 遺構実測図(柱穴)

る。もう1ヶ所は、中央東側で木製品（木製蓋）の下に59枚が重なって出土している。なお、木製品が遺存していたのは、古銭から出る成分の作用によってのようであるとの御教示を鹿児島大学歯学部の小片丘彦教授より賜わった。

15号土坑は、長軸0.8m・短軸0.65m・深さ1.05mの長方形プランを呈している。遺物は出土していない。

16号土坑と17号土坑は、重なって検出された。16号土坑は、長軸1.1m・短軸1.05m（推定）・深さ0.9mの方形、17号土坑は、長軸1.5m・短軸1.25m・深さ1.1mの円形（橢円形）プランを呈している。

遺物は、16号土坑から繩文土器31点・土師器27点・青磁2点・白磁1点・染付1点・陶器2点・金属器1点・石器2点の計67点が出土し、17号土坑からは、繩文土器2点・土師器33点・陶器1点・石器2点の計38点が出土している。

18号土坑は、調査地のいちばん西側で、長軸1.05m・短軸0.75m・深さ0.5mの長方形プランを呈している。遺物は出土していない。

溝状遺構

溝状遺構は、調査地の中央部より2ヶ所検出している。

1号溝状遺構は、長さ8.5m・巾0.25m・深さ0.15mと浅く細長い遺構である。遺物は出土していない。

2号溝状遺構は、長さ10.9m・巾0.7m・深さ0.35mと1号よりも幅広く長い。遺物は、土師器等が出土している。

この溝状遺構の使用目的については、解明されていない。

2・遺物（第11図～第17図）

古墳時代以降の遺物としては、土坑・ピット内を中心に土師器・須恵質土器・陶器・青磁・白磁・磁器・染付・金属器・木製品・貝殻・明鏡・土錘・石錘が出土している。

土師器（第13図・第14図）

土師器は、総数1,044点で遺物のなかでは最も多いため、その半分以上は土坑内から出土している。器形としては、ほとんどが杯であるが、杯にも小さいものから大きいもの、底部がはっきりしているものや丸みをおびて境目がはっきりしないもの、ヘラ切り底のものや量的には少ないが糸切り底のもの等バラエティに富んでいる。これら

は、時期的・時代的な変化であると考えられる。

各部の計測・詳細については、表1土師器計測表に記載しているので、ここでは省略する。

須恵質土器（第14図）

須恵質土器は2点出土している。61は、灰色をした須恵質の皿で、口縁部径8.5cm・底部径7cm・器高1.2cm・糸切り底の底部を有する。調整はヨコナデ。62は、灰色をした須恵質の杯であるが、口縁部が欠損している。底部径7.9cm、ヘラ切り底である。調整はヨコナデ。

陶 器（第14図）

陶器は、120点も出土しているが、すべて破片である。63は、口縁部径31cm・底部径10.5cmの擂鉢である。64は、口縁端が横に肥厚し、口縁部がT字状になっている鉢である。65は、口縁部がかなり肥厚した甕である。66は、釉付陶器で、口縁部径7.8cm・高台径3.8cm・器高1.8cmを計る高台付の皿である。

白 磁（第15図）

白磁は、完形1点を含めて17点出土している。67は、口縁部径14.2cm（推定）、口縁端部で大きく外反し丸くおさめられている端反り碗である。68は、16号土坑から出土したもので、口縁部径7.9cm・高台径3.6cm・器高3.5cmの高台付碗である。高台より内湾しながら立ち上がり、口縁部で直線的になり口縁端部まで至っている。

青 磁（第15図）

青磁は41点出土している。69は、口縁部推定16cmの碗である。青緑色を呈している。70は、肥厚した壺の口縁部で、口唇部は断面三角形状になっている。明緑青色を呈している。71は、胴上部より外反し、そして口縁端部で直上する鉢で、器厚は比較的薄い。72は、小瓶等の蓋として使用されていたと思われるもので、上面は直径3.3cm、陵花を施している。73は、盤の底部で、P-145より出土している。高台の径8.4cm・幅1.1cmで端部は丸みをもっている。器厚は厚く1.4cmを計る。

磁 器（第15図）

75は、香炉で3号土坑より出土している。口縁部径8.2cm・脚からの高さ3.6cm、脚は3つで猫の足を形どっている。釉は、外面のみで内面にはかかっていない。灰色を呈している。

染 付（第15図）

表2 土師器調査表

(単位: cm)

箇面番号	器形	口縁径	器高	底部径	色	調	焼成	胎土	粒子	良好	ヨコナデ	出土地	備考
第13図-30	Ⅲ			6.5	Hue5YR7/6	微 盤	こまかい	土	粒子	"	4号	口縁部欠損 ヘラ切り底	
" -31	"	8.3	1.9	6.0	Hue5YR7/8	"	"	"	"	"	1/3欠損		
" -32	"	7.0	2.0	4.2	Hue7.5YR8/4	浅 黄 橙	"	"	"	"	5号	ヘラ切り底	
" -33	杯			5.2	Hue2.5YR8/6	"	"	"	"	"	口縁部欠損 糸切り底		
" -34	"	9.3(堆)	2.0	5.3(堆)	"	"	"	"	"	"	部分P1上損 ヘラ切り底		
" -35	"	12.2(堆)	3.6	5.5(堆)	盤	Hue5YR7/6	"	"	"	"	"		
" -36	"	12.4	3.7	6.5	"	"	"	"	"	"	1/3窓口縁部欠損 ヘラ切り底		
" -37	"	13.0(堆)	4.1	6.5	Hue5YR7/8	"	"	"	"	"	部分欠損 ヘラ切り底		
" -38	"	6.5(堆)	1.8	5.0	"	"	"	"	"	"	8号	糸切り底	
" -39	"	13.2	2.4	10.0	Hue7.5YR8/4	浅 黄 橙	2mm前後の 粒子を含む	"	"	"	13号	"	
" -40	"	13.0	2.2	8.8	Hue5YR7/6	微 粒 盤	"	"	"	"	"	土 坑	ヘラ切り底
" -41	"		2.4	"	Hue7.5YR8/4	"	"	"	"	"	3/4欠損		
" -42	"	12.3	2.2	8.9	Hue5YR7/6	2mm前後の 粒子を含む	"	"	"	"	"	ヘラ切り底	
" -43	"	12.2	2.4	9.0	Hue10YR8/4	"	"	"	"	"	口縁部少々欠損 ヘラ切り底		
" -44	"	12.5	2.6	9.0	Hue10YR8/4	"	"	"	"	"	"		
" -45	"	13.1	2.7	7.0	"	"	"	"	"	"	14号	口縁部1/3欠損 土 坑	ヘラ切り底
" -46	"	13.9	2.2	7.7	"	"	"	"	"	"	"		
" -47	"	12.5	2.3	6.8	Hue7.5YR8/4	浅 黄 橙	"	"	"	"	口縁部底部1/3欠損 ヘラ切り底		
" -48	"	12.3	2.3	7.2	Hue7.5YR7/6	"	"	"	"	"	16号	口縁部底部1/3欠損 ヘラ切り底	
第4図-49	"	12.9	2.2	7.1	"	"	"	"	"	"	P-91	口縁部尖っている 2mm前後の 粒子を含む	
" -50	"	12.5	2.1	7.2	"	"	"	"	"	"	P-117	口縁部には2条の凹痕 ヘラ切り底	
" -51	"	10.6(堆)	1.3	8.0	Hue2.5YR7/8	微 粒 盤	こまかい	"	"	"	P-128	"	
" -52	"		2.7	"	Hue10YR8/6	2mm前後の 粒子を含む	"	"	"	"	"		
" -53	"		2.8	"	Hue5.5YR8/3	浅 黄 橙	こまかい	"	"	"	"		
" -54	"	11.5(堆)	2.2	7.7	Hue7.5YR8/6	浅 黄 橙	2mm前後の 粒子を含む	"	"	"	"		
" -55	"		1.2	7.0	Hue5YR7/6	"	"	"	"	"	"		
" -56	"	11.3(堆)	2.7	"	Hue10YR8/4	"	"	"	"	"	"		
" -57	"	7.6(堆)	2.0	5.3	Hue5YR7/8	"	"	"	"	"	"		
" -58	"	12.7	2.3	8.6	Hue10YR8/4	"	"	"	"	"	口縁部少々欠損 ヘラ切り底		
" -59	"	12.5	2.3	8.0	"	"	"	"	"	"	"		
" -60	"	10.1	2.3	7.0	Hue7.5YR8/6	"	"	"	"	"	"		

染付は、わりと少なく18点で、唐草文や草花文等が描かれている。76は、碗の胴部片で、77・78は口縁部に反りをもつ端反り碗の口縁部である。77は、口縁端部が厚く、丸みをもっている。79は、ゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部まで至る碗で、口唇部は丸みをもっている。80・81は、底部付近で、81のほうが器厚が厚い。

香 爐（第15図）

82は、P-325から出土したもので、大きな香炉の脚部と思われる。外面は赤褐色、内面は黒色を呈している。

金属器（第17図）

金属器は、腐食が著しく110・111を図示したものの何であるか判断がつかない。そのなかで112と113は腐食がわりと少なく、釘と思われる。112は16号土坑から、113は14号土壙から出土している。

木製品〔木製蓋〕（第17図）

114は、14号土壙から出土したもので、縦9cm・横7.7cm・厚さ0.7cmの楕円形を呈している。なお、この下からは59枚もの明銭（洪武通宝）が重なって出土している。

貝 裂（第17図）

115は、P-298から出土したもので、長さ31.8cm・中央幅10.5cm・中央の厚さ1.5cm・断面がアーチ状をしたカキ貝の殻である。

明 銭（第17図）

明銭はすべて洪武通宝で、14号土壙から出土したものである。直径2.2cm前後、麻の紐に通して埋葬したようである。

土 錘（第15図）

土錘は、7点出土しているが、大きさでは3.5cm～6cm、形ではたまご状のものから長方形に近いものまでとバラエティに富んでいる。

各部の計測の詳細については表3に記載したので、ここでは省略する。

石 錘（第15図）

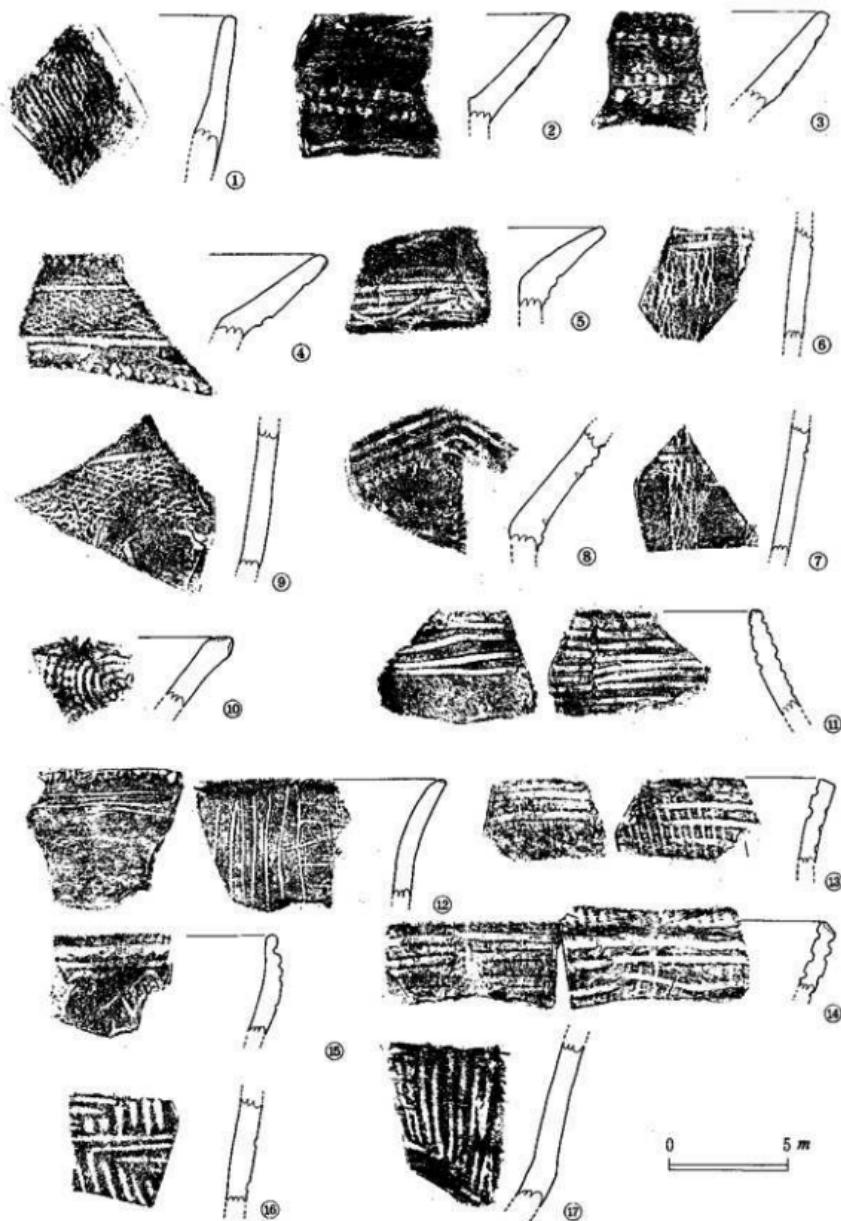
この石錘については、当初金属器の1部分ではないかと思われたが、よくみてみると、やわらかい石を利用してつくられた錘であることが判明した。

各部の計測の詳細については表3に記載したので、ここでは省略する。

表3 土錘・石錘計測表

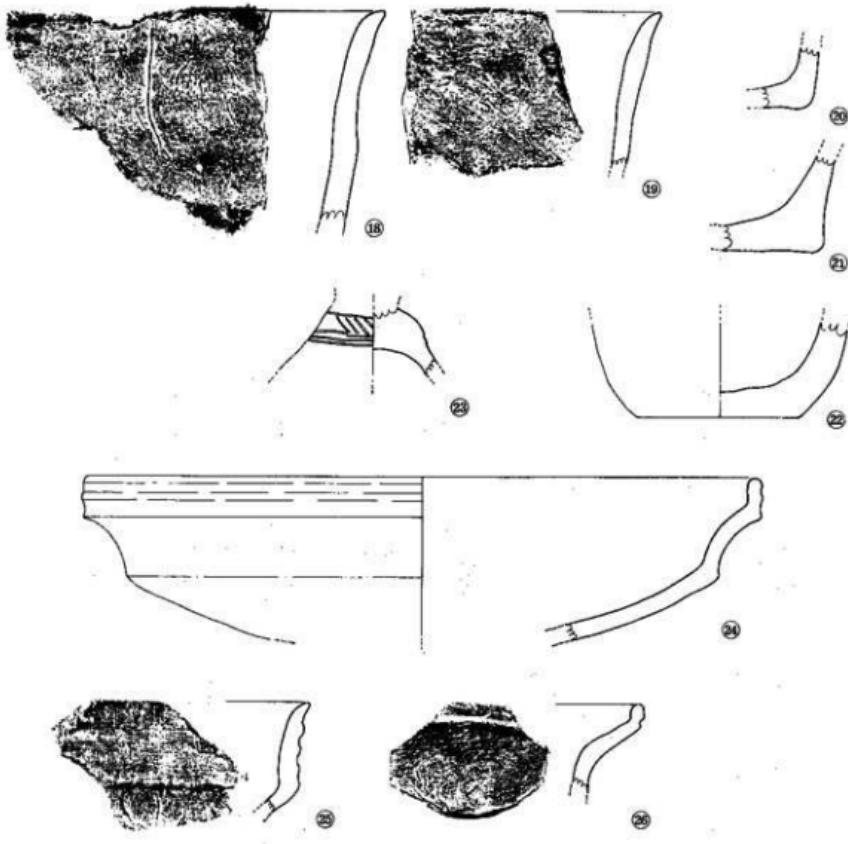
単位: cm

図面番号	高さ	幅(中央)	内径	備考
第15図-83	4.7	2.5	0.5	
" -84	3.5	1.7	0.4	
" -85	3.3	1.7	0.6	
" -86	6.0	2.0	0.8	
" -87	3.1(現存)	1.3	0.3	わずかに欠損している
" -88	3.6(現存)	1.1	0.4	"
" -89	3.6	1.3	0.3	
" -90	2.9	1.1	0.2	
" -91	2.9(現存)	0.9	0.3	わずかに欠損している
" -92	3.2(現存)	0.7	0.4	"



第11図 出土遺物実測図・拓影(縄文土器)

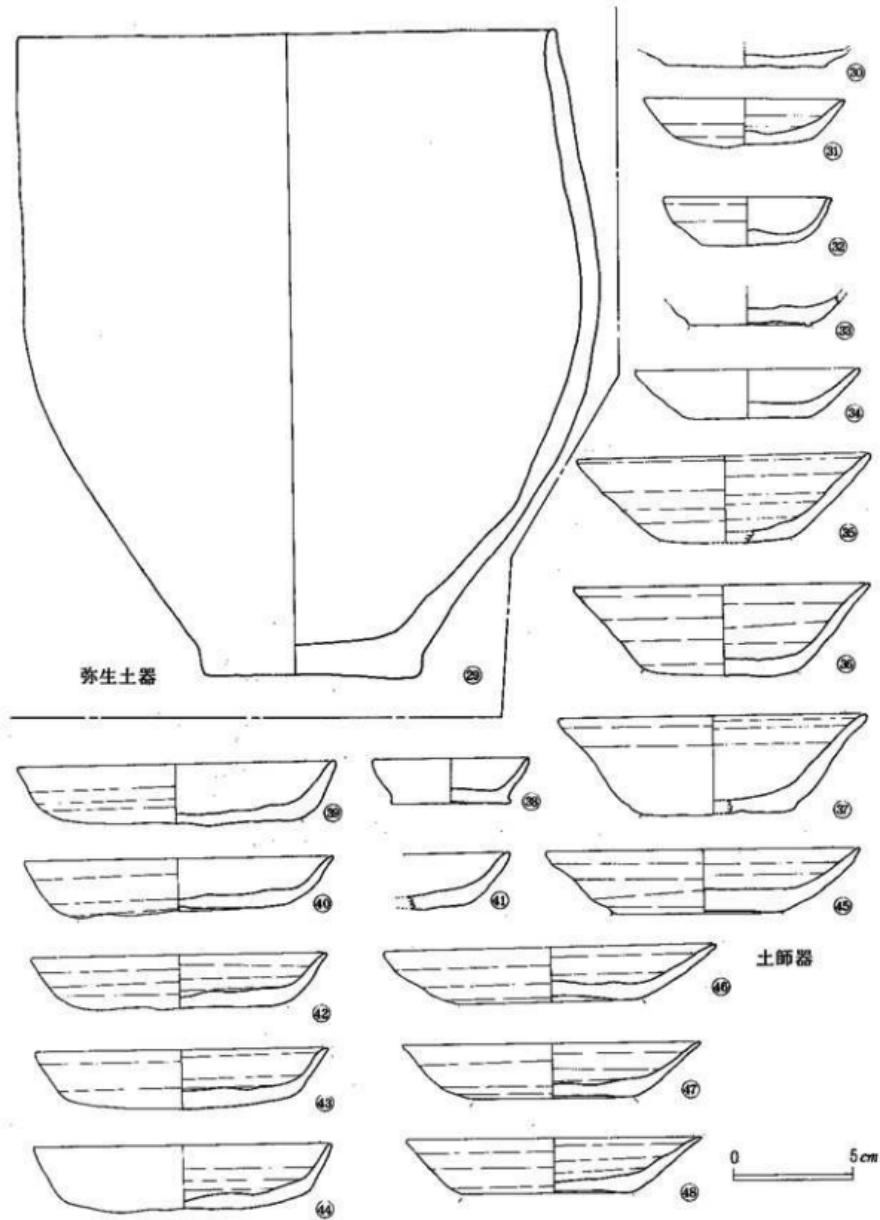
縄文土器



弥生土器

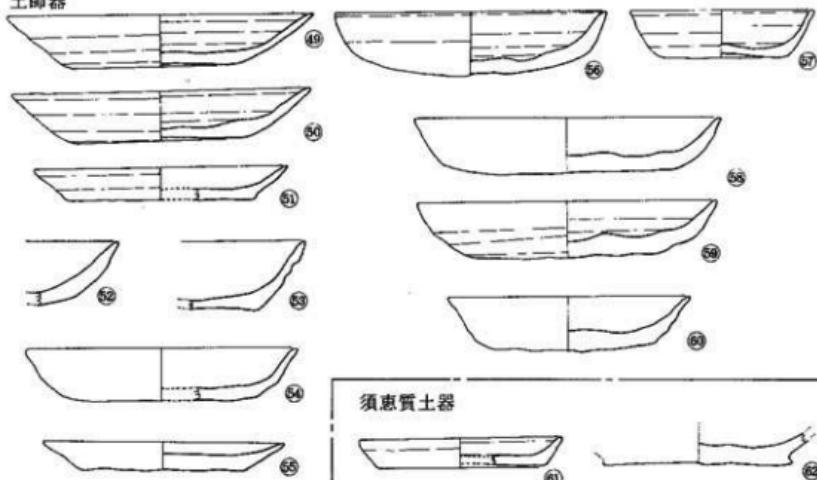


第12図 出土遺物実測図・拓影(縄文土器・弥生土器)

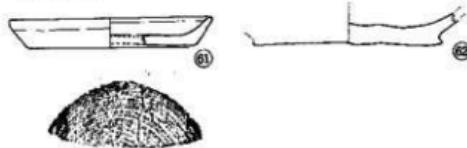


第13図 出土遺物実測図（弥生土器・土師器）

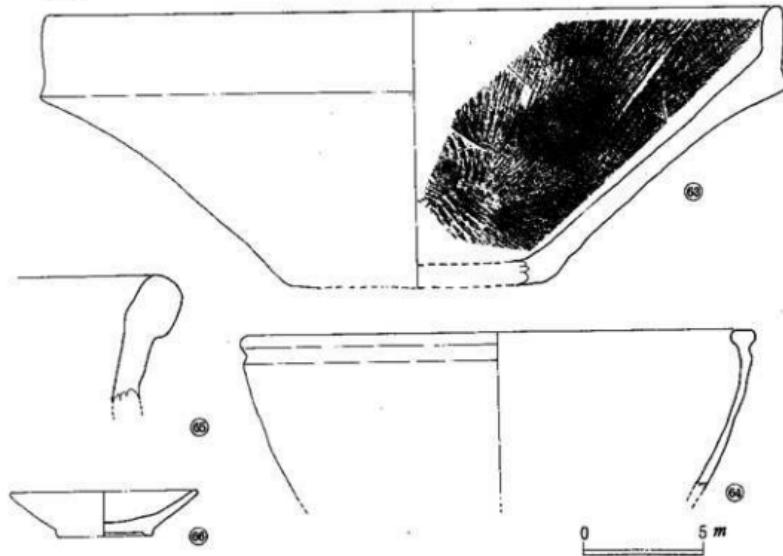
土師器



須恵質土器



陶器



第14図 出土遺物実測図（土師器・須恵質土器・陶器）

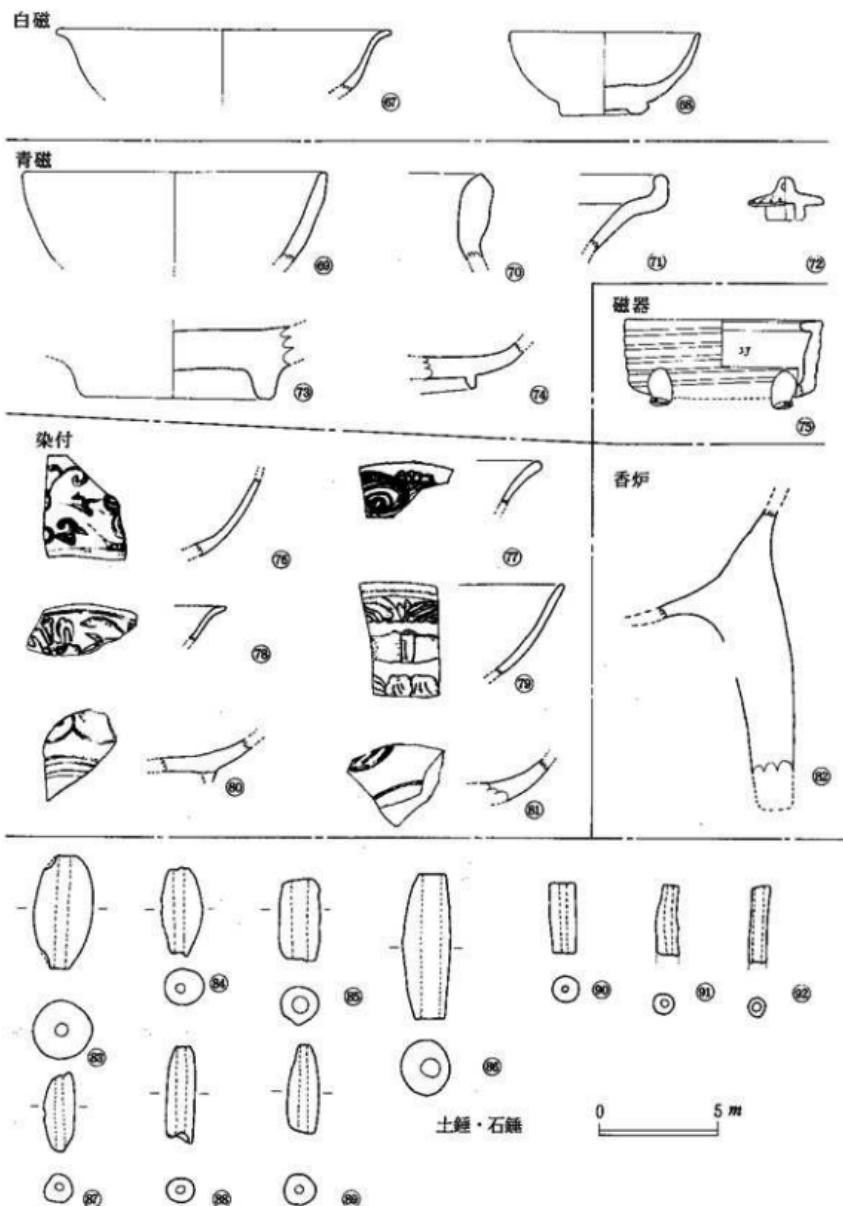
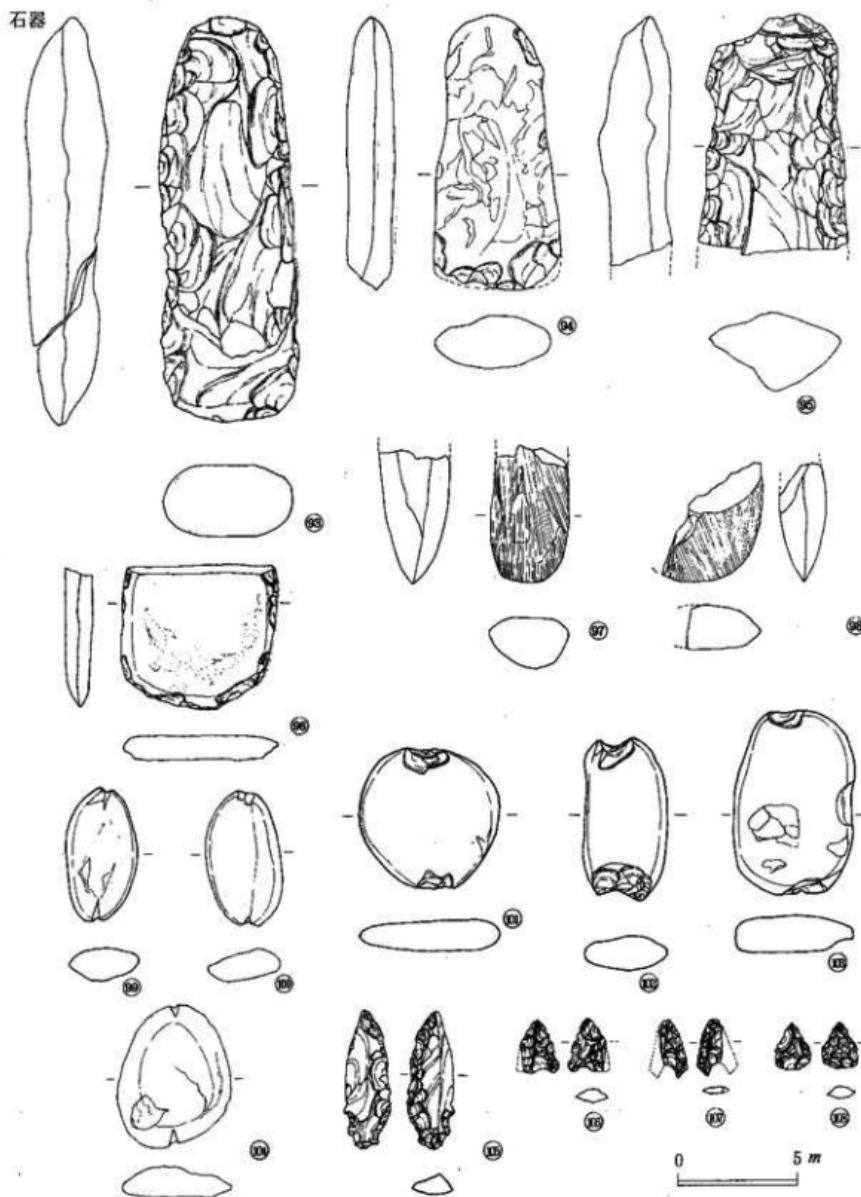
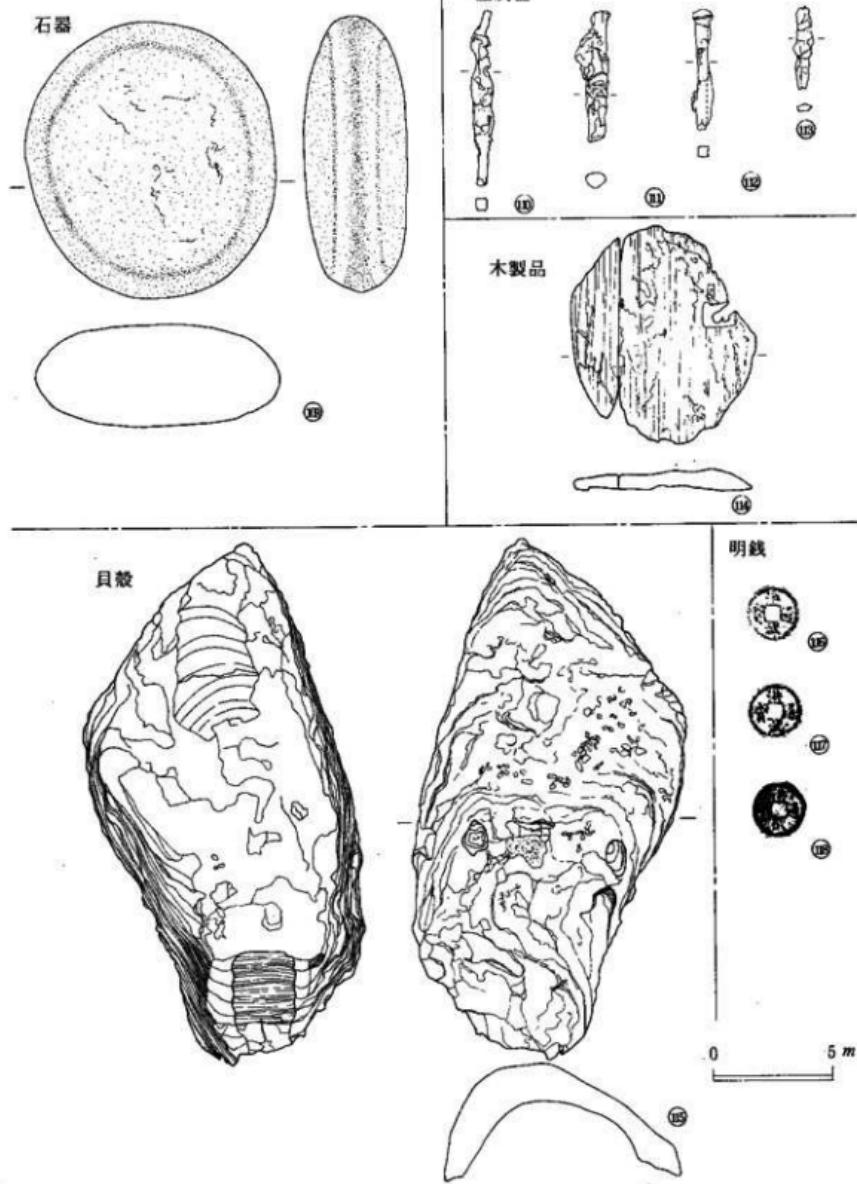


図15図 出土遺物実測図(白磁・青磁・染付・磁器・土錘・石錘)



第16図 出土遺物実測図(石器)



第17図 出土遺物実測図（石器・鐵製品・木製品・貝殻）

第3章 まとめ

日高正晴

岳惣寺遺跡は都於郡城主伊東祐充の菩提寺が建立された場所であるが、事業者がその堆土を採取するというので、その事前調査として発掘調査が行われた。調査結果は、1,200m²の対象地域内の主として中央部から東南にかけて遺構が群在し、柱穴状遺構にても329ヶ所認められたが、中でも、かなりな規模の長方形土坑が15ヶ所・方形土坑2ヶ所、それに円形土坑2ヶ所も発見された。この方形、円形の土坑遺構については昭和62年度に行った都於郡城本丸の発掘調査においても確認されたが、その時も土坑規模の甚大なものもあって、その用途がどのような目的のものであったか明確にすることはできなかった。しかし、いずれにしても貯水および貯蔵用に供したものではないかと推察される。なお、この遺跡の西南部に現われた円形土壙内から人骨片、明錢（洪武通宝）などが出土し、この遺構が唯一の中世墓壙であることが確認された。これまで県内においても、中世墓に人骨が出土した例はほとんどなく、しかもこの土壙墓が中世日向の本拠である都於郡城の一角から出土し、しかも壮年の女性とまで推定できたことは貴重な資料といわなければならない。それから、ほとんど遺跡の認められない西側調査地域で、両側にそれぞれ4ヶ所の柱穴を有する長方形の平床式建物遺構が発見された。この遺跡に多数現われた柱穴状遺構の中では、唯一の整然たる柱穴をもった中世建物跡を確認したことになる。つぎに、出土遺物について述べてみると、この岳惣寺遺跡からは縄文土器、弥生土器および土師器、それに陶磁器など中世期の遺物まで検出され、極めて変化に富んだ遺跡として注目される。まず、縄文土器では曾畠式、塞ノ神武、前平式などの早・前期の土器が出土し、さらに下っては縄文後晩期の土器片も散見でき、それに伴って蛤刃の石斧片も認められた。ついで、多量に出土した土師器であるが、この中には古代からの伝統を踏襲した焼成、色調ともに土師質の土器も認められるが、一方、瓦器質の土器もかなり混在していた。この土師器質の土器は都於郡城本丸の発掘調査においても同様に出土しており、しかもそれに共伴して中世の陶磁器が検出されたことは本丸出土の土師器類を中世の時期に比定したように、岳惣寺遺跡の土師器類についても中世期にあてたいと思う。また、この遺跡から出土した陶磁器についてであるが、これらの青磁、白磁、

染付はすべて中国の輸入陶磁のようであり、青磁片は本丸出土と同様、16世紀前半頃輸入された龍泉窯系統の青磁であるが、白磁、染付（青花）にしても同時期の中国輸入陶磁と推定できる。それから前述した円形土壙墓内出土の遺物であるが、発見された明銭、洪武通宝は足利義満が応永年間頃、中国から輸入したものであり、これと共に伴して出土した土師器も含めて、この土壙墓の時期は室町時代に推定される。さて、この遺跡の年代であるが、縄文、弥生時代は別として歴史時代における岳惣寺遺跡の時期については、中国明時代の輸入陶磁を伴う土師器、あるいは土壙墓内の副葬の洪武通宝と共に伴した土師器が遺跡全面に出土した土師器と同一系統のものであることなどから岳惣寺遺跡の年代を岳惣寺が建立された前後頃に推定して室町時代後半期に比定した。ところで、この岳惣寺遺跡全般について考察してみたいと思うが、この遺跡の所在地は三財川に沿った急峻な右岸台地上にあったため、漁獲用の石錘、土錘なども出土しているが、古く縄文早期の時代には防衛的立地条件にかなった地点として生活の場になったようである。また伊東氏時代になってからは、都於郡城への通路の一つである荒武坂を登り詰めた地点に所在し、城郭とまでは称することはできないかもしれないが、一種の城郭的存在とみなすこともできる。そのような地点であったので伊東祐充の菩提寺としての岳惣寺も建立されたのであり、一旦緩急の場合は、寺院が直ちに武力集団の拠点に転換することもできた。

註：西都市教育委員会『都於郡城址本丸跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集。

1988. 3

図 版

通　　鑑

卷之三

通鑑卷之三

通鑑卷之三

通鑑卷之三

通鑑卷之三

通鑑卷之三

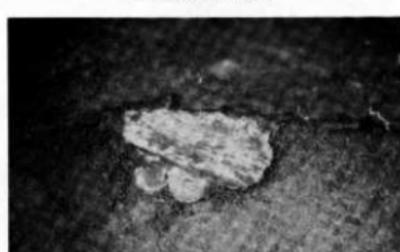
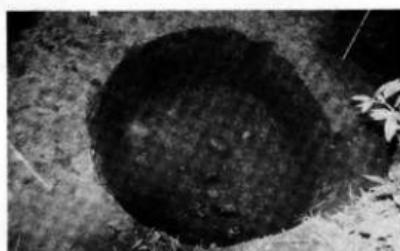
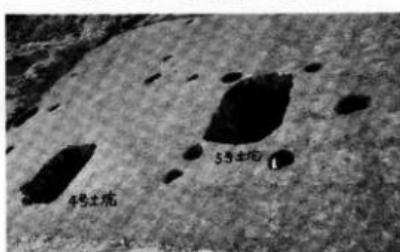
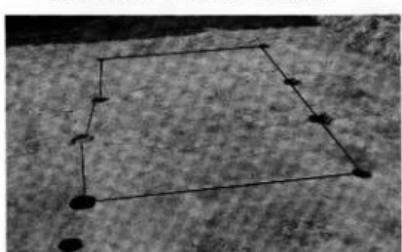
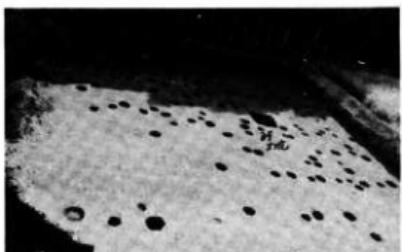
通鑑卷之三

通鑑卷之三

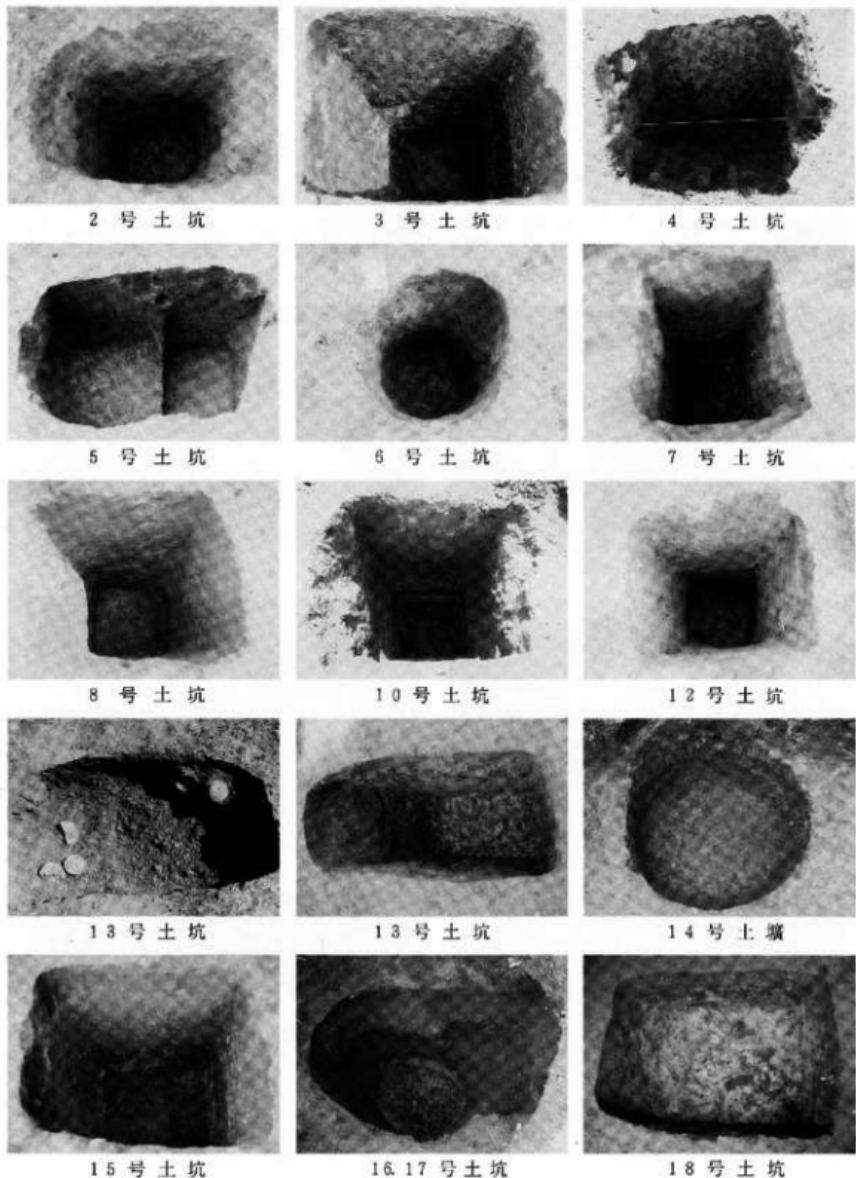
通鑑卷之三

通鑑卷之三

図版 1 遺構・遺物検出状況



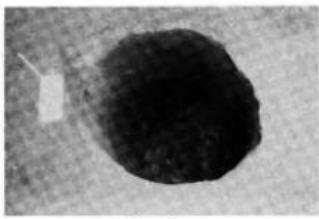
图版2 遗構(土坑・土壤)



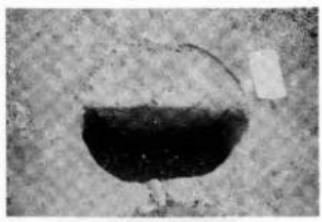
図版3 遺構(ピット)



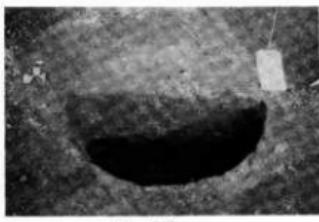
P - 4



P - 9



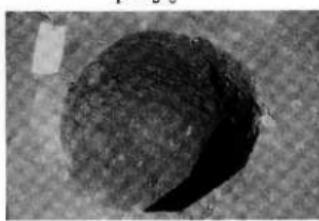
P - 1 6



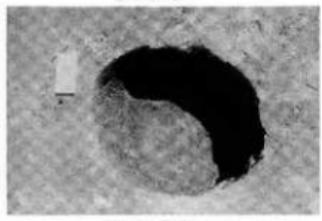
P - 2 0



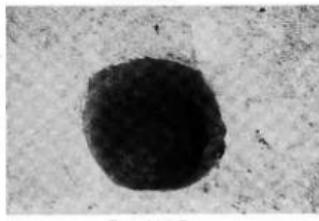
P - 2 8



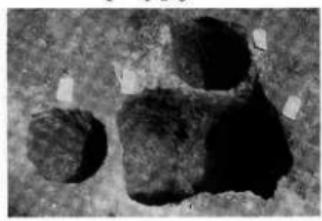
P - 8 2



P - 1 2 3



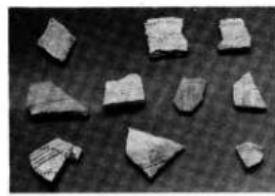
P - 1 4 5



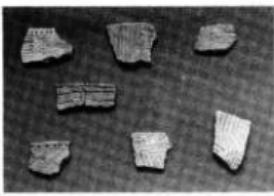
P - 1 4 7 • P - 1 6 6 ~ 1 6 8

P～ピット(柱穴)

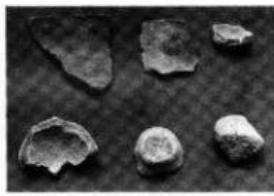
図版4 出土遺物



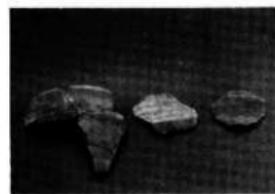
1~10



11~17



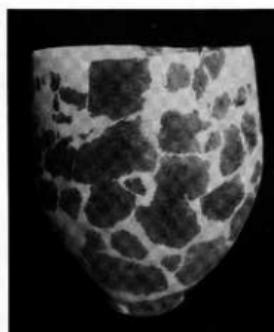
18~23



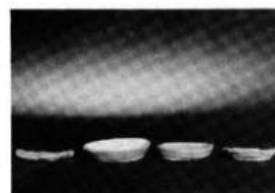
24~26



27. 28



29



30~33



34~37



38~41



42~44



45~47



48~50

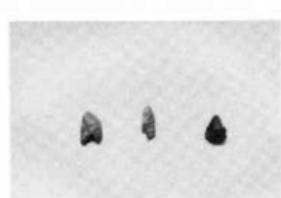
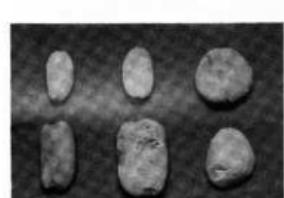
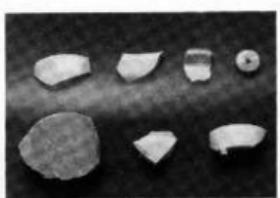
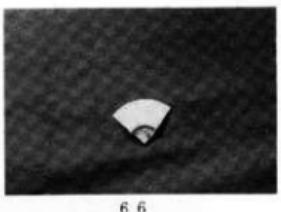
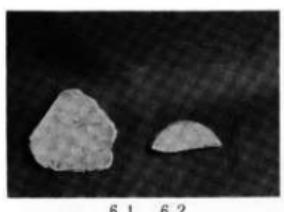


51~57

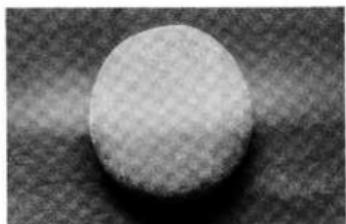


58~60

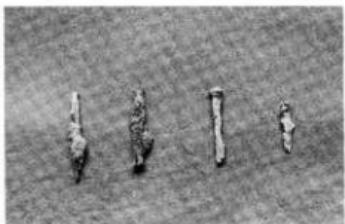
図版5 出土遺物



圖版 6 出土遺物



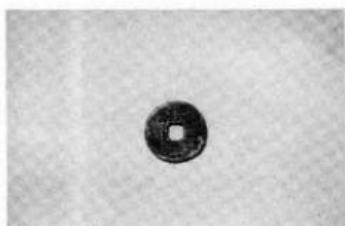
109



110~113



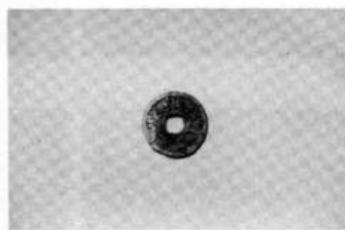
114



116



115



117



118

第4章 岳惣寺遺跡出土の中世人骨について

小片丘彦・峰 和治（鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座）

1988年9月、西都市岳惣寺遺跡の土壙墓より出土した中世人骨1体に関する所見を以下に記載する。なお本人骨は100枚を越える古銭（洪武通宝）や土師器の皿などを伴っていた。

1. 遺存状況

保存は良好とはいはず、同定できる部位としては頭蓋冠の右半、下頸体、歯、右大腿骨と脛骨の膝関節部、左大腿骨体の上部などがあるが、いずれも断片的で、骨表面の腐食もかなり進んでいる。埋葬姿勢は不明である。

2. 形質

頭蓋は全体に小さい。遺存している右眼窩上縁部から眼窩全体の大きさを推測してみてもかなり小型で、ナジオンと右フロントマラーレ・オルビターレ間の距離は43mmである。正中矢状前頭弦長は104mm。前頭隆起は弱い。前頭縫合の残存や頭頂切痕骨は認められないが、右ブテリオン部に翼上骨が存在する。乳突上稜が軽度の隆起を示す。三主縫合は冠状縫合の右半、矢状縫合の前半、右ラムダ縫合の下部1/4が観察でき、このうち閉鎖が始まっているのは矢状縫合の内板だけである。歯列の状態は次の通りである。

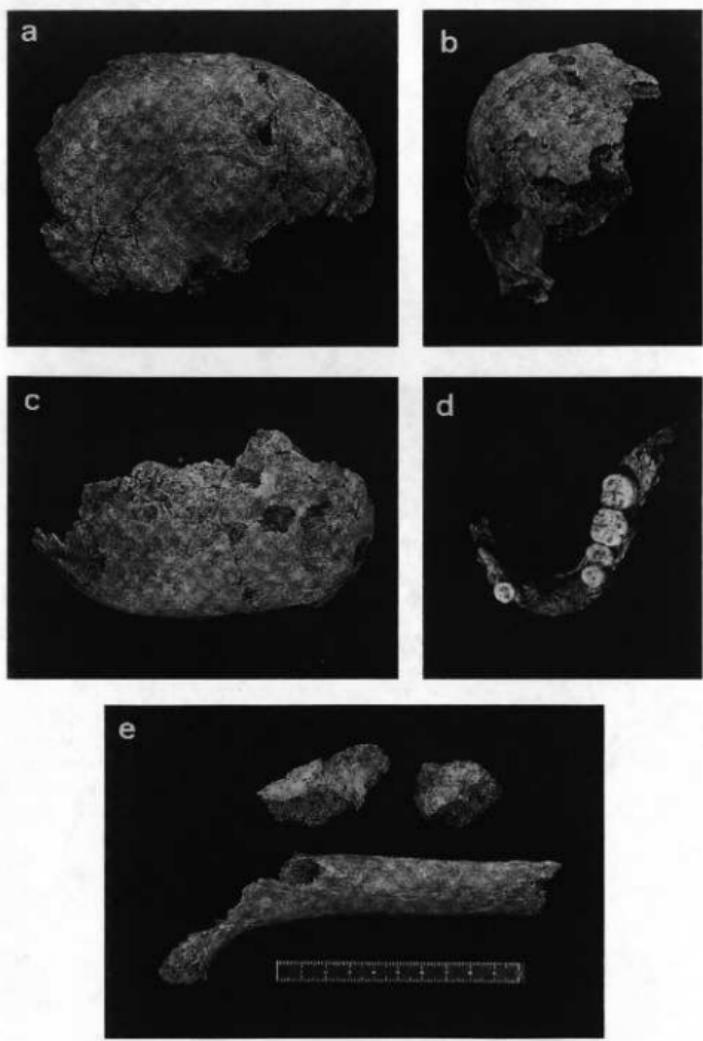


- / : 歯槽破損
- : 歯冠消失
- ・ : 遊離歯
- * : 先天性欠如

咬耗は小臼歯がMartinの1度、大臼歯が2度である。ただ $\text{I}8$ は歯冠だけが遊離して残っており、咬耗も認められないため、萌出していたかどうかは不明である。体骨で形質が見てとれるのは左大腿骨体上部片だけで、骨体上横径25mm、同矢状径22mmと細く、上骨体断面示数は88.0で扁平性は認められない。

3. 性・年齢

頭蓋の全体的な径や大腿骨のきゃしゃなところから女性と推定される。年齢は、矢状縫合内板に一部閉鎖が始まっているものの、歯の咬耗度からみて壮年期というのが妥当と思われる。



岳惲寺遺跡出土人骨 a. 頭蓋側面（右） b. 頭蓋前面
c. 頭蓋上面 d. 下頷骨上面 e. 下肢骨片

